

千葉県に現存する方三間仏堂について

About the existing Ho-Sangendo Buddhist Temples in Chiba Prefecture

府川直人*1
FUKAWA Naoto

要約 千葉県には室町時代後期に建立され、重要文化財の指定を受けた、茅葺きの寄棟屋根を持った小規模な方三間仏堂が7棟確認できる。中世密教系寺院の阿弥陀堂形式を持ち、和様を基本に禅宗様の影響を受けた仏堂である。中世の社寺建築は、『木割』による寸法体系によって建造されていることから、その比率によって特徴を分析できる。修理工事報告書に記載の寸法確認および現地における調査を行い比較検証した結果を報告する。

1 はじめに

千葉県に現存する方三間仏堂は、地域住民の深い信仰の対象（光堂）として、今日までその姿が維持されてきた。室町時代後期に造営された遺構とされる、茅葺きの寄棟屋根を持つ小規模な仏堂である。

これらの仏堂は限られた地域に、一定の時期に建てられた遺構であることが知られ、個々の関連性が指摘されているものの、詳細に比較した報告を確認することができない。そこで、修理工事報告書に記載された図面にて、寸法を確認できる7棟を対象とし、現地にて調査を行う。その結果と合わせて細部について比較を行い、各部の比率の分析および考察を行うこととする。

2 方三間仏堂

方三間仏堂とは、桁行三間、梁間三間の方形の平面形状に一重の屋根を持つ仏堂で、中世に建立された小規模な遺構が全国各地に残る。千葉県に残る遺構は、中世の天台宗や真言宗の密教系の仏堂で、内陣（仏の空間）・外陣（人の空間）の領域を内包する阿弥陀堂の形式をとるものである。

本稿で調査の対象とする栄福寺薬師堂、西願寺阿弥陀堂、宝珠院観音堂、石堂寺薬師堂、泉福寺薬師堂、鳳来寺観音堂、大聖寺不動堂の全7棟は、室町時代後期の建立とされ（図1）、いずれも国の重要文化財（建造物）に指定されている。

3 建築の様式

調査対象の遺構は内部空間に板敷きの床を張り、外部に縁側を廻す内陣・外陣の結界を持つ和様の仏堂で、その構造や意匠に禅宗様の要素を取り入

れた折衷様（新和様）といえるものである。

鎌倉時代に禅宗と共に日本に伝えられた禅宗様の建築様式は、室町時代には禅宗寺院に限らず、大仏様や禅宗様を取り入れた折衷様（新和様）の建築様式として、各地に建立されることになる。特に東日本（関東地方）における和様の仏堂に禅宗様の影響が確認できる

外観上の特徴は、方形平面を持つ小規模な方三間仏堂の屋根として、東日本では一般的な形状とされる茅葺きの寄棟屋根を持つことがあげられる。

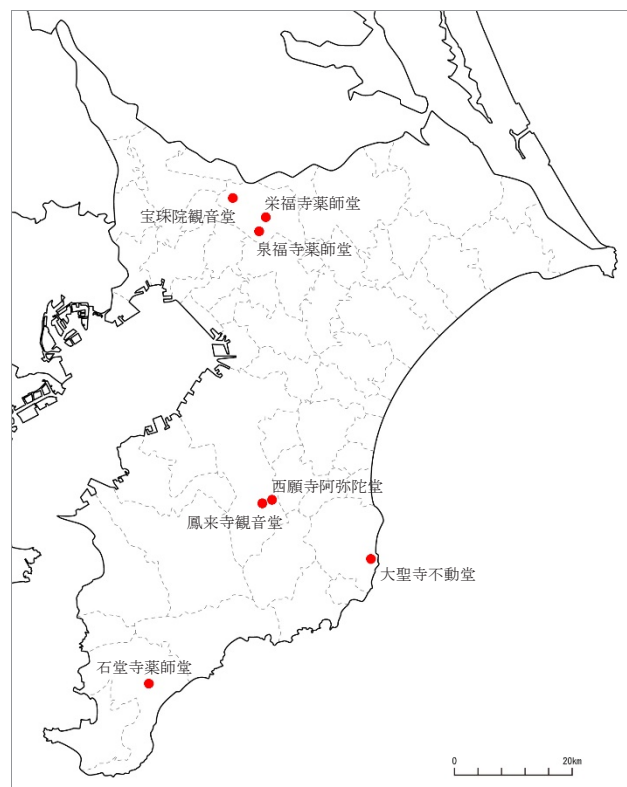


図1 千葉県内の方三間仏堂の所在

*1 住居環境科 Department of Housing Environment

4 千葉県の現存遺構

4-1 比較の方法

仏堂などの社寺建築は、基準となる寸法をもとに各部を比例関係によって設計する『木割』による寸法体系を用いて建てられている。寸法の分析および考察は修理工事報告書に記載された図面のある7棟を対象とし、現地にて調査した結果と合わせて、細部について比較を行う(表1)。また、比較寸法に関しては修理工事実施時に調査された寸法が、報告書作成時に公表されていることから、報告書から読み取れる寸法を使用する。

1. 栄福寺薬師堂



所在：印西市角田
形式：桁行・梁間共に三間
屋根は茅葺、寄棟造
軒は一重の平行垂木
来迎柱側柱筋通り内陣後端間の中半
外陣、内陣に一面鏡天井

2. 西願寺阿弥陀堂



所在：市原市平蔵
形式：桁行・梁間共に三間
屋根は茅葺、寄棟造
軒は二重の扇垂木
来迎柱側柱筋より脇間3尺余後退
天井は1×1.5間の鏡天井、化粧屋根裏

3. 宝珠院観音堂



所在：印西市小倉
形式：桁行・梁間共に三間
屋根は茅葺、寄棟造
軒は一重の平行垂木
来迎柱側柱筋より脇間2.8尺後退
外陣、内陣に一面鏡天井

4. 石堂寺薬師堂



所在：南房総市石堂
形式：桁行・梁間共に三間
屋根は茅葺、寄棟造
軒は一重の平行垂木
虹梁大瓶束にて来迎柱を省略
天井は1×1間の鏡天井、化粧屋根裏

5. 泉福寺薬師堂



所在：印西市岩戸
形式：桁行・梁間共に三間
屋根は茅葺、寄棟造
軒は一重の平行垂木
来迎柱側柱筋より脇間4尺余後退
天井は一面竿縁天井
内陣一部小天井

6. 鳳来寺観音堂



所在：市原市吉沢
形式：桁行・梁間共に三間
屋根は茅葺、寄棟造
軒は二重の扇垂木
来迎柱側柱筋より脇間1/2後退
天井は1×1間の鏡天井、化粧屋根裏

7. 大聖寺不動堂



所在：いすみ市大原
形式：桁行・梁間共に三間
屋根は茅葺、寄棟造
軒は二重の平行垂木
来迎柱側柱筋より脇間3尺余後退
内陣を小組格天井、化粧屋根裏

なお、後世に行われた変更箇所については、修理工事に伴う解体時の調査を通して、柱や貫に残る取付釘跡や方立板穴から、創建当時の仕様に復原されている。

表1 方三間仏堂の平面・断面

	1. 栄福寺薬師堂 ²⁾	2. 西願寺阿弥陀堂 ³⁾	3. 宝珠院観音堂 ⁴⁾	4. 石堂寺薬師堂 ⁵⁾	5. 泉福寺薬師堂 ⁶⁾	6. 鳳来寺観音堂 ⁷⁾	7. 大聖寺不動堂 ⁸⁾
平面							
断面							

*1 住居環境科

4-2 平面計画

内部は小規模和様仏堂の定型である密教寺院の阿弥陀堂の形式を持ち、内陣・外陣の結界を持つ平面構成が基本となっている。石堂寺薬師堂は大虹梁に太瓶束を用いて、堂内の主柱を4本とも省略し来迎柱を設けていない。それ以外の6堂では、側柱の柱筋より須弥壇の設置される来迎壁の位置まで、来迎柱の側柱筋より脇間1/2前後の後退がみられる。礼拝空間(内陣)の拡大に加え、仏堂内部の仰高性を弱め内部空間を広く見せる効果を併せ持つものである。なお、内外陣の区画を持たない鳳来寺観音堂は手前主柱が省略されている。

4-3 柱間

方三間仏堂は、正面柱間の比率に様式の特徴が表れる。石堂寺薬師堂の脇間と中間の比率は、組物を等間隔とする詰組の「アイタ」が成立する禅宗様の1:1.5となる。西願寺阿弥陀堂は本格的な禅宗様の形式を持つものの、1:1.43の比率により「アイタ」が成立していない。栄福寺薬師堂の1:1.0~大聖寺不動堂の1:1.25の比率は、和様の仏堂に多く見られる柱間比率である(表2)。

全ての堂は柱頭部に粽を設け、頭貫及び台輪に木鼻をつけるなど禅宗様の手法が用いられている。軸組の形式は禅宗様の貫構造とし、大聖寺以外は台輪を備える。また、縁と敷居の境には切目長押を配置する。なお、宝珠院観音堂と石堂寺薬師堂を除き、内法部には貫に加えて和様の内法長押を設けている。

4-4 柱高と柱太さ

和様建築の建ちの高さは、禅宗様に比べて低いとされるが、仏堂としての機能を考慮すると9尺以上の柱高さが必要となる。小屋裏を化粧軒裏とするものが脇間の2.0倍程度の柱高を持つのに対して、天井を一面にはるものが10尺弱の高さで、脇間の1.6倍程度と低いことが確認できる。

柱太さは、室町時代後期には中間の0.1を標準

とし、小規模な堂は同0.12程度とされるという傾向が、そのまま表れている(表2)。¹⁾

4-5 内部架構

禅宗様の仏堂は、内部架構を現した化粧軒裏に内陣を鏡天井とする仕様である。西願寺阿弥陀堂は来迎柱を側柱筋より半間後退させた内陣架構とし、化粧軒裏に1×1.5間の鏡天井を持つ禅宗様の仕様である。来迎柱を持たない石堂寺薬師堂は、内部架構を現した化粧軒裏に1×1間の鏡天井を持つ。鳳来寺観音堂は半間後退させた来迎柱を持つものの内陣架構とせず、大虹梁に太瓶束を用いて化粧軒裏に1×1間の鏡天井としている。大聖寺不動堂は内部架構を現した化粧軒裏に1×1.5間の小組格天井としているなど、内部架構に禅宗様の影響が強く現れていることが確認できる(表3)。

なお、内外陣境界に建具を持ち来迎柱後退が側面脇間寸法と関係のないものは一面に天井を張る。

4-6 斗拱組織

仏堂の外観は、上部桁を受ける組物の組成に様式の特徴が表れる。西願寺阿弥陀堂は2本の尾垂木を持つ三手先斗拱で、内部尾垂木も有角の2本となり上尾垂木尻が化粧軒裏中央の母屋を支える典型的な禅宗様の手法を持つ。鳳来寺観音堂は尾垂木を持たない二手先斗拱だが、内部尾垂木を1本持ち尾垂木尻が母屋を支える現存遺構に類を見ない形式を持つものである。鳳来寺観音堂、西願寺阿弥陀堂以外の5堂は、小規模の仏堂に用いられる出組や平三斗の組物を備える(表3)。大聖寺不動堂は中備を間斗束とし、内陣虹梁上に板葺股を備える和様色の濃いものとなっている。

4-7 垂木と軒出

西願寺阿弥陀堂、鳳来寺観音堂とも扇垂木ではあるが、中間の中央中備間が平行垂木となる室町期に用いられた手法で、完全な扇垂木ではない¹⁾。西願寺阿弥陀堂、鳳来寺観音堂を除く5堂のうち、宝珠院観音堂が疎垂木で、残り4堂が半繁の平行

表2 方三間仏堂の寸法比較 (単位:尺)

No	名称	年代	所在地	規模		柱間			柱径・柱高				軒出・軒高		
				桁行	梁間	脇間 L ₂	中間 L ₁	柱間比率	柱径 φ ₁	φ ₁ /L ₁	柱高 H ₁	柱高 H ₂	軒出 R	R/L ₂	軒高
1	栄福寺薬師堂	1472	印西市	18.06	18.06	6.02	6.02	1:1.0	0.65	0.108	9.655	7.36	4.08	0.68	10.165
2	西願寺阿弥陀堂	1495	市原市	21.65	21.65	6.31	9.03	1:1.43	0.88	0.097	11.48	8.50	7.55	1.22	13.30
3	宝珠院観音堂	1563頃	印西市	14.95	16.55	4.80	5.35	1:1.11	0.66	0.123	9.88	6.93	3.96	0.83	9.78
4	石堂寺薬師堂	1575	南房総市	15.512	15.512	4.43	6.647	1:1.50	0.68	0.102	10.885	8.21	3.40	0.76	11.22
5	泉福寺薬師堂	室町末	印西市	18.79	19.35	6.08	6.635	1:1.09	0.70	0.106	9.92	7.57	4.155	0.68	10.58
6	鳳来寺観音堂	室町後	市原市	17.33	17.33	5.61	6.11	1:1.09	0.70	0.115	11.85	8.30	4.19	0.74	14.85
7	大聖寺不動堂	室町後	いすみ市	23.322	25.116	7.176	8.97	1:1.25	0.93	0.104	12.27	9.89	4.85	0.80	13.875

・表中の寸法は修理工事報告書竣工図記載のもの。メートル表記のものは尺間法表記に換算している
・柱径は主屋側柱、柱高 H₁:柱口から台輪下、柱高 H₂:床から台輪下、軒出は柱芯より茅負下端角とする

表3 方三間仏堂の各部仕様 (単位:尺)

No	名称	宗派	構成		軸部			軒廻り			天井		縁廻り		
			柱間	向拝	内法長押	頭貫	台輪	斗拱	中備	垂木	天井	中央天井	切目縁	幅	
1	栄福寺薬師堂	天台宗	完数	有	内法貫	○	○	出三斗	間斗束	平行	一軒	竿縁・鏡	一面	四方	3.15
2	西願寺阿弥陀堂	天台宗	比		○	○	○	三手先	詰組	扇	二軒	化粧軒裏	1×1.5鏡	四方	5.50
3	宝珠院観音堂	—	比	無	内法貫	○	○	平三斗	詰組	平行	一軒	鏡	一面	四方	3.00
4	石堂寺薬師堂	天台宗	アイタ	無	内法貫	○	○	平三斗	詰組	平行	一軒	化粧軒裏	1×1鏡	四方	3.00
5	泉福寺薬師堂	真言宗		無	○	○	○	出三斗	詰組	平行	一軒	竿縁	一面	三方	3.80
6	鳳来寺観音堂	—		無	○	○	○	二手先	詰組	扇	二軒	化粧軒裏	1×1鏡	四方	3.05
7	大聖寺不動堂	天台宗		無	○	○	なし	出組	間斗束	平行	二軒	化粧軒裏	1×1.5小組格	四方	3.85

垂木である。脇間に対する軒出の割合は、西願寺阿弥陀堂が1.22と突出して大きく、他の6堂が0.68~0.83と近似しているのに対して、極端に大きな値を示している。ただし、各堂とも茅葺き屋根の葺代が影響して十分な軒出が演出されている。

また、鳳来寺観音堂と宝珠院観音堂は修理工事の際に後年付加された向拝を排して、当初の姿に復原されているが、栄福寺薬師堂の向拝は後年補われたものであるにも拘らず、当初の姿に復原されることなく残されたままである。

4-8 細部意匠

細部装飾においても禅宗様の特徴が見られる。全ての堂は頭貫鼻に彫られた渦巻の絵様が確認できる。下から渦を巻く型は関東地方における主流のタイプとされ、地域性がはっきり出ることが指摘されている¹⁾。台輪を持たない大聖寺の頭貫も同様の絵様である。

正面柱間装置は中間に両開き棧唐戸、脇間に引違い舞良戸、正面三面とも棧唐戸のもの、中間にのみ引分け格子戸を設けるものに分類でき、禅宗様と和様の仕様を使い分けている。

堂内部は板敷きの床を張り、四方に切目縁を廻すものと、正面および側面の外陣外回り部にのみ縁を廻すもの(泉福寺薬師堂)がある(表3)。

5 まとめ

中世以降、地方に展開した小規模仏堂の多くは、床板を張った和様の空間を基調としながら、軸部や軒廻り、細部意匠に禅宗様や大仏様の各種要素を自由に組み合わせて建立された。千葉県の遺構は室町期に関東地方に見られる、床付き方三間仏堂の一般的な形式といえる。¹⁾

調査した7堂のうち、西願寺阿弥陀堂は内外陣結界を持つ阿弥陀堂でありながら、典型的な禅宗様の手法を持つ仏堂であることが確認できる。また、鳳来寺観音堂も本格的な禅宗様の手法が主要

な部分に確認でき、この2堂に関しては折衷様というより禅宗様の仏堂といえるほどの仕様である。

石堂寺薬師堂と大聖寺不動堂の2堂に関しては、内部架構を現した化粧軒裏に天井を張るなど禅宗様の影響が強く現れていることが確認できる。

残る3堂に関しても、規模や形式、外観に相似する部分が多く、細部の様子からも関連性が確認でき、禅宗様の影響を受けた一様でない意匠を持つ仏堂であることがわかる。¹⁾

6 おわりに

建築の構成や内外部意匠および各部の寸法を分析することで、千葉県に現存する室町時代後期に建立された方三間仏堂に関して、和様仏堂の外部および内部意匠に禅宗様の影響が、強く現れていることが確認できた。また、限られた小規模空間において、外陣から内陣へと水平方向に展開する和様の空間と、中心性のある垂直方向に展開する禅宗様の空間がどのように構築されたのか、意匠としての様式と構造・空間構成としての様式の取捨選択があったことがわかった。

参考文献

- 『中世禅宗様建築の研究』 関口欣也 昭和44年
- 『重要文化財栄福寺薬師堂修理工事報告書』 重要文化財栄福寺薬師堂修理委員会 1969年
- 『重要文化財西願寺阿弥陀堂修理工事報告書』 重要文化財西願寺阿弥陀堂修理委員会 昭和30年
- 『重要文化財観音堂(光堂)修理工事報告書』 重要文化財観音堂(光堂)修理工事委員会 昭和29年
- 『重要文化財石堂寺薬師堂修理工事報告書』 文化財建造物保存技術協会 昭和46年
- 『重要文化財泉福寺薬師堂修理工事報告書』 文化財建造物保存技術協会 昭和57年
- 『重要文化財鳳来寺観音堂修理工事報告書』 重要文化財鳳来寺観音堂修理委員会委員会 1967年
- 『国宝大聖寺不動堂修理工事報告書』 国宝大聖寺不動堂修理事務所 昭和13年

*1 住居環境科 Department of Housing Environment